

求める熱い夜【お風呂編】

扉を開けると、ほんのり立ちこめる湯気が、浴室の明かりを柔らかくぼかしていた。

タオル姿の彼女は、さっきまでの激しい表情とは打って変わって、どこか恥ずかしそうに頬を染めて、こっちをちらりと見上げてくる。

「……入ろっか。一緒に」

言葉とは裏腹に、彼女の足取りはそわそわしていて、俺の手をそっと握るその指先にも少し力が入っていた。湯船にはまだお湯は張っていない。

彼女はゆっくりとタオルをほどくと、視線を逸らすようにくるりと背を向ける。その背中からは、ついさっきまで俺の下で乱れていたなんて思えないほど、静かでしなやかなラインが浮かび上がっていた。

「……あんまり見ないで」

そう言いながらも、俺にはその声がどこか嬉しそうに聞こえた。

湯気越しに見える首筋まで、ほんのり赤く染まっていた。俺もタオルを外して彼女の後を追うようにバスルームへ入ると、彼女はそのままシャワーを取り出し、ぬるめの温度

に設定して、俺の方へそっと向けた。

「まずは……さっぱりしょ？」

シャワーの水音が空気を満たして、ふたりの距離が少しずつ近づいていく。

彼女の手が俺の腕をなぞるように動いて、熱すぎないお湯がそのあとを追ってくる。

言葉は少ないけれど、触れ合うたびに鼓動が近くなる。

そして、静かに、お互いの肌が近づいて、

ほんの少しだけ、甘い時間が始まっていく――

彼女はボディソープを手に取り、泡立てると、俺の胸元にそっと手を置いた。

「ちゃんと洗ってあげるから、じっとしてて……」

そう言いながら、柔らかい泡が俺の体を撫でるように広がっていく。

最初は胸、次に腹、肩……その手つきは丁寧で、ふわりとした心地よさがじんわりと広がっていく。とろけるような甘さの中に、微かなくすぐったさも混じっていた。

「……なんか、こうやって触っていると、変な感じするよな」

ふと口にしたその言葉に、彼女がくすっと笑う。

そして、泡のついた手を止めずに、指先で優しく脇腹をなぞる。

「変な感じって……どんな？」

耳元でそっと囁くように言われて、ちょっとだけ息が詰まる。

そのまま彼女は背中に回り込んで、背筋を丁寧に洗いながら、体を寄せてきた。

肩越しに彼女の胸が触れて、俺の呼吸が少し乱れる。

「ん……当たってるの、わかってるでしょ？」

彼女は背中に頬を寄せて、ぴたりとくっついたまま動かない。

そのまま、濡れた肌と泡の間に、静かな熱が溜まっていく。

「次、ユウタの番ね。洗って？」

タオルを手渡ししながら振り向いた彼女の顔は、さっきまでの照れた雰囲気とは違って、どこか期待に満ちた、少しだけ艶を帯びた笑みを浮かべていた。

その体を、俺の手で丁寧に――

そう思った瞬間には、もう、目の前の彼女の背中に手を伸ばしていた。

背中に手を滑らせると、彼女の肌は思っていたよりずっと柔らかかった。

タオル越しに、優しく円を描くように撫でると、彼女は小さく身じろぎする。